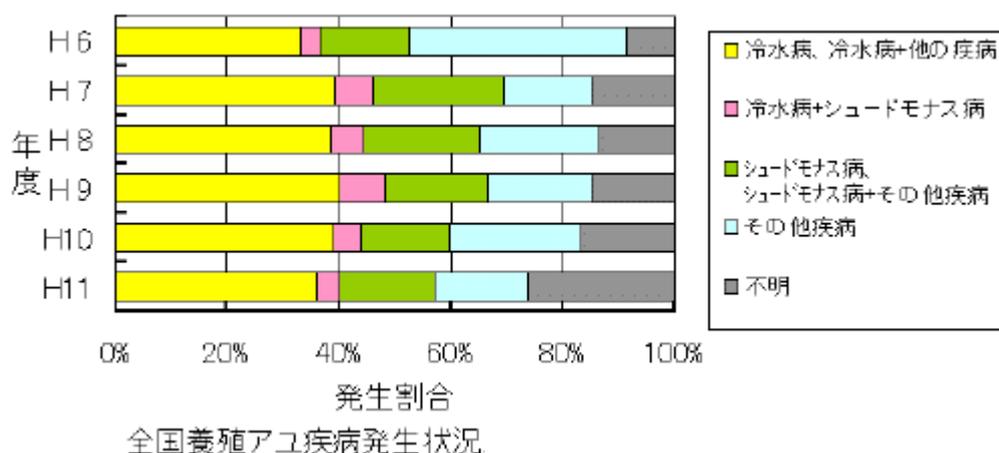


最近問題になっているアユの魚病について

病理科 嶋村一郎

Key word; アユ, 魚病, 冷水病, シュードモナス病

本県のアユ養殖業は全国第 1 位の生産量を揚げており、平成 3 年には最高の 5,006 トン(農林水産統計)の生産がありました。しかし、近年では年々減少し、平成 10 年度には 2,944 トンに減少しています。減少の原因は様々ですが、最近問題となっている魚病による被害も一つの要因といえるでしょう。



平成 6 年から平成 11 年の間、各県の水産試験場等でアユの病理検査を行った結果(全国湖沼河川養殖研究会アユ冷水病研究部会資料)の魚病別割合を図に掲載しましたが、冷水病原因菌が検出されたのが全検査数の 40%前後、シュードモナス病原因菌が検出されたのが 20%前後を占めています。

徳島県内での発生状況もほぼ全国の発生状況と同様で、冷水病が約 40%、シュードモナス病が約 20%となっています。今回はアユの主要な病気である、冷水病とシュードモナス病についてこれまでの経緯等について簡単に説明します。

(1)冷水病について

アユの冷水病は 1987 年(S62 年)初めて報告され、1992 年(H4 年)から発生件数が増加し、全国的に見られるようになりました。冷水病は様々な症状があることや人為感染が極めて困難であることなど、これまでの細菌性の魚病と異なる点が多くあり、最初は冷水病菌以外の原因が疑われたこともありました。

現在では冷水病は全国的に発生が見られ、養殖現場においてほぼ周年発生しています。また、すべてのサイズのアユに感染することから被害量も多く、アユでの重要な疾病となっています。天

然河川での発生も他の地域では認められており、この場合天然河川ということもあり、へい死魚がたくさん見つかつてから発生が確認されることが多いようです。

冷水病対策としては、養殖現場では投薬が有効であります。使用できる薬剤が少なく、投薬による治療が難しくなっているのが現状です。また、河川での発生が認められた場合は当然のことながら有効な対処法がありません。これらのことから、今後の

冷水病対策は予防に重点を置いた方法が重要になります。

現在水産試験場では冷水病予防対策を中心に試験を実施しています。具体的には、冷水病予防のためのワクチン開発試験、放流種苗から冷水病菌を持ち込ませないための放流時のアユ体表を消毒するための消毒試験、種苗生産時のアユ卵の消毒技法の開発試験等です。

(2) シュードモナス病について

シュードモナス病も多くの地域でみられる病気です。ただし、この病気は冷水病と違い、天然河川のアユではこれまで一度も確認されておらず、養殖場でのみ発生が確認されています。この病気も様々なサイズのアユに感染します。養殖場での対処方法ですが、この病原菌は医薬品に対して抵抗力を持っているため有効な対処法は無いのが現状です。また、有効な対処法の無いこの病気は一度発生すると、なかなか完治しないことも特徴として挙げられます。

この病気も一度発生すると対処するのが難しくなるため、予防に重点を置いた対策が重要となります。

現在水産試験場では予防のためのワクチン開発試験を実施しています。

以上これまで現在アユで問題となっている 2 つの病気について簡単に説明しました。現在、水産試験場でもこれらの病気の対策試験を実施中ですが、冷水病、シュードモナス病共にこれまでの魚の病気とは違った特徴を持っていることから、難しいことが多いのも実状です。しかし、冷水病については全国の水産試験場が参加しているアユ冷水病対策研究会に本県も参加し、各県と共同で取り組んでいます。

また、シュードモナス病についても平成 12 年度から全国湖沼河川養殖研究会アユシュードモナス病研究部会が発足し、それにも本県は参加する予定です。

これらの研究会に参加し、他の県の方々と意見交換や連絡試験など共同で行うことにより、単独で試験を進めるより効率的に技術開発ができるものと考えています。

これからも調査、巡回等ではいろいろとお世話になることがあるかもしれませんが、その時はよろしくお願いします。また、何かありましたら水産試験場の方までご連絡ください。